

あとがき——本学の発展のために

本学創立六十周年の歴史は、激動の昭和史の中で、教育と研究を守り、創造してきた歴史でありました。

一九二八(昭和三年)の創立以来、一貫して建学の精神である「質実剛健、積極進取」の学風のもとに、国際感覚に富む人間の育成をめざし、すでに卒業生十一万人を社会に送り出しました。一方、この六十年の歩みは、卒業生、学生、教職員による大学の教育と研究と実務を支えてきた歴史であるといってもよいでしょう。

ところで、本学の歴史的学風の特徴を概観すると三つのことが浮んできます。

第一に、「質実剛健、積極進取」のバイオニア・スピリットを一貫して保持してきたということがあります。それは激動の昭和史の中で、その変化を恐れず、新しい時代を創造する進取の学風を作ってきたということではないでしょうか。もちろん、六〇年代末から七〇年代前半において、大学教育をめぐる学生と教職員との間で厳しい緊張関係をもったことを忘れることはできません。

第二に、研究・教育者の積極的吸収を図ってきたこととあります。教員採用に当っては、短大、各学部の研究・教育の自治と自由の精神に基づき、一時期の管理的選択から、教学の自主的、公開的選択へと移行した歴史をもっていいることができます。

第三に、「開放性」の精神に溢れていることとあります。世界に開き、地域に根ざした大学を志向していることとあります。各学部の教育のあり方はもちろんですが、経貿研、人文研、工学研、法学研、常民研、情報処理センター、国際交流センター、平塚キャンパスの経営、理の両学部における研究のあり方を見ましても、開放性に富んでいると

いってよいでしょう。

したがって本学が積極進取の精神に富み、時代を先取りし、すぐれた研究者を集める力量を持ち、開かれた大学を志向していることを評価したいとおもいます。

ところで大学の本来の生命は、学問研究の自由と自治の創造にあります。この六十年間、先輩の教員が、さまざまな社会的、政治的、経済的、文化的諸条件の変化の中で、たとえ紆余曲折があつたにしても、学生、職員とともに、大学の生命を守り、築きあげてきたことを誇りとしてよいでしょう。

私たちは、日本が世界の経済大国にまで到達しながら、生活は中小国であるという実感を持っています。こうした状況を認識しながら、いま大学は二十一世紀に向けて着実に前進を続けています。こうした中で、私たちは、本学の歴史と伝統を踏まえ、本学の発展のために、改めて、大学とはなんであったか、なんであるのか、なんであるべきかを認識することが大切なのではないのでしょうか。本学六十年の過去の歴史から未来に向けて進むためにも、いま六十年の歴史を探り、本学の再発見をする必要があります。歴史を尊重しないで、どうして現在を知ることができませんか。いまだどんな状況にあるかを知らずして、未来を見通すことができませんか。本学は、六十年の歴史を通じて、ひとりひとりの知の創造のための再発見を必要としているのではないのでしょうか。六十周年記念論文集発刊の意義も、こうした問題意識のひとつとして存在することとおもいます。

本論文集は、本学の歴史的特質を念頭に置きながら、二十一世紀の社会、経済、人間、および学問、技術、文化を展望できる内容となるよう編集委員会での、さまざまな議論を経たうえで編集したものであります。

事務的経過をのべますと、昨年四月、理事会から六十周年記念事業の一環として教員の論文集を刊行したいという提案が教学にされました。そこで教学は、短大、各学部教授会で、編集委員を選出し、六十周年記念論文集編集委員会を設け、数回の会議を経てまとめることになりました。全教員に論文公募方式を取り、本年四月末の締切り日に二

十二点が集まり、これらの論文の構成について議論した結果、最終的に「目次」のようになりました。

最後になりましたが、私たち委員会は、執筆者、各学部教授会、学長、理事会、理事長、職員の各位の御協力と御支援に心から敬意を表する次第です。なお論文集は、私のものを除き、各執筆者の个性的でかつ意欲的なものであるとおもいますが、ここに各専門分野の先生、読者のご批判を期待しています。本年四月、経営学部と理学部が発足しましたが、両学部の教員の執筆の機会が時間的にえられなかったことを残念に思っています。

なお、宮井隆教授は、論文執筆後逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

一九八九年八月二十五日

創立六十周年記念論文集編集委員会

委員長 清水嘉治